琉球大学学術リポジトリ

# 昭和文学の展望（3）－日本浪曼派の古典回帰序説－



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 琉球大学教育学部<br>公開日: 2007-07-18<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/988 |

# 昭和文学の展望(Ⅲ)

## ——日本浪曼派の古典回帰序説——

小澤保博

一はしがき
二「越びと」から「聖家族」
三「六の宮の姫君」から「曠野」
四「水のうへ」から「出帆」
五立原道造とヘルダーリン
六まとめ

### 一、はしがき

昭和十年前後に保田与重郎等の日本浪曼派に日本への回帰の姿勢がみられたのは著名な文学史的事実ではあるが、今日、日本浪曼派の提起した問題が重要な側面を持ちながら軽視されがちなのは、当時の時流に便乗した俗的な日本主義を内包しているからに他ならない。

私は日本近代の閉鎖的状況を打破するため日本への回帰を示すに至った内的必然性についてこれから考えていきたい。日本回帰の考えをみせた作家達は、その内部に近代を否定し古典に回帰する内的必然性を持たなくてはならない。精神内部の必然性が単純な古代憧憬であれ、日本近代に対する絶望であれ、内的必然のあるところに回帰の姿勢は危機の様相を示すことになるはずである。保田与重郎等の文学運動の解明そのものは、民族や思想にかかわるので私のテーマからはずれることになるが、いずれ何等かのかたちで関ることになろう。

堀辰雄がある時期から日本的なものへの傾斜を示すようになり、内的必然性に沿って古典回帰を遂げていったと考えるのは、論議それ自体無理はない。私は堀辰雄が芥川から課せられた文学的課題を処理していく過程にあって必然的に王朝文学に親しみ、やがて折口信夫の古典世界に接近していく姿を本論の中で捉え得たと信じたい。彼の「日本的なるもの」への復帰によって生まれた個々の作品についての考察は他日にゆずるが、王朝文学に開眼する彼の内部に近代的自我への疑問と喪失感、さらに郷土喪失の意識があったことは確かであろう。京都、大和への旅行は日本的伝統との密着を求め、新しい魂の故郷を求めようとする彼の内的必然ではなかったのか。こうした堀辰雄の緩慢な自己改革に対して、急激な内的革命をめざしたのは弟子である立原道造であり、その人生の軌跡は今日からみると芥川龍之介のそれのように何か激しさに満ちたものであった。

### 二、「越びと」から「聖家族」

大正十二年十月、三十二歳の芥川龍之介は一高在学中の堀辰雄と識り合った。初めて軽井沢へ避暑にでかけた芥川は「つるや旅館」に逗留し、堀辰雄、室生犀星、山本有三、片山広子らと交際を持つ。この年譜的事実は、後に堀辰雄の「聖家族」において描かれ、母と娘の物語として独自の創造的世界に変貌する。最初に芥川の軽井沢滞在について考えておきたい。初めて軽井沢で夏を過したのは大正十三年七月二十二日から八月二十三日まで、次は翌年の八月二十日から三週間で共に「つるや旅館」を宿泊地としている。

八月三日。晴。室生犀星来る。午後四時軽井沢に着せし由。「汽車の中で眠られなくなってね。麦酒を一本飲んだけれども、やっぱりちょっこしも眠られなくなってね」と言う。今日より旧館の階下の部屋を去

り、犀星とともに「離れ」に移る。

（大正十三年「軽井沢日記」）

八月四日。晴。堀辰雄来る。暮に及んで白雨あり。犀星、辰雄とともに軽井沢ホテルに赴き、久しぶりに西洋風の晩食を喫す。

大正十三年の「軽井沢日記」あるいは大正十四年の「軽井沢日記」（別稿）から伺うに芥川は「つるや旅館」に逗留しながら近くの軽井沢ホテルや万平ホテルで西洋風の晩食を取ったりレモネードを飲んだりしながら主として社会主義思想書を読んでいたようだ。「犀星と共に晩涼を遂い、骨董屋、洋服屋などを覗き歩く」（大正十三年八月三日）と日記にある。この時芥川が接触を持ったのは、前記の片山広子の他に、山本有三、萩原朔太郎、室生犀星、堀辰雄さらに朔太郎の妹の愛子、ゆき子他には村田幸兵衛、土屋秀夫、高橋健二らが数えられる。（註1）

「軽井沢日記」（別稿）には芥川や堀が片山広子と親しく接することに対して室生犀星が癇癪を起こした旨の記述がある。小島政二郎は夜冷える軽井沢に夏を過したことと一日中日光の入らない北向きの書斎を持ったことを芥川の生活上の最大の失敗としているが、軽井沢での夏の生活は、気分的には決して不愉快なものではなかったろうと思える。「舌の上に蝶が眠っている」（大正十四年「軽井沢で」）と彼がよんだところの片山広子夫人との思い出があるからで「さやうなら。手風琴の町、さやうなら、僕の抒情詩時代」と二年間の避暑地の思い出を総括している。片山広子の面影は芥川の抒情詩「相聞」に伺える。

あひ見ざりせばなかなかに／そらに忘れてやまんとや／野べのけむりも一すぢに／立ちての後はかなしとよ（相聞一）

野にまひたるすげ笠の／なにかは路に落ちざらん／わが名はいかで惜しむべき／惜しむは君が名のみとよ（相聞二）

また立ちかへる水無月の／歎きを誰にかたるべき／沙羅のみづ枝に花さけば／かなしき人の目ぞ見ゆる（相聞三、註2）

片山広子の横顔を沙羅（サラあるいはシャラ）の花にみた芥川は、別に次のような断片も残している。

ひとり山路を越え行けば／雪は幽かにつもるなり／ともに山路は越えずとも／ひとり眠べき君ならば（未定詩稿、註3）

これとは別に芥川は「越びと」という二十五首の施頭歌を残しているが、その中には

あぶら火のひかりに見つつこころ悲しも／み雪ふる越路のひとの年はぎのふみ

むらぎものわがこころ知る人の恋しも／み雪ふる越路のひとはわがこころ知る

という作がある。ここでいう「越路のひと」（越し人）とはたんに北陸の人の意であるのか、あるいは「恋し人」をかけた掛け詞かもしれない。これらの歌の想を得たのは、芥川の軽井沢滞在中であることを思うと、ひとり山路を越えるのは軽井沢に逗留する芥川自身で、ひとり寝ぬのは「万平ホテル」にいる片山広子のことと考えられないこともない。こうした芥川の秘めたる抒情は、死後残された遺書で次のごとく回顧されることになる。

しかし恋愛を感じなかった訣ではない。僕はその時に「越し人」「相聞」等の抒情詩を作り、深入りしない前に脱却した（遺書、註4）

芥川の晩年、身辺にいた女性は片山広子の他に三宅やす子、九条武子、岡本かの子等の才女が数えられ、〈僕の生存に不利を生じたことを少からず後悔してゐる〉（遺書）と芥川を嘆かせた夫人もいたが、彼の憧憬の対象としては片山広子が一番である。芥川自身「或阿呆の一生」の中で次のように書いている。

彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒

情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍った、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだった

片山広子は芥川の葬儀に喪服に黒袴の姿で参列したが（註5）、この時の夫人を描くことから堀辰雄の文学的生涯は出発する。以下堀辰雄の芥川克服のあとをたどりながら論を進めていく。

片山広子は明治十一年生まれ、松村みね子は筆名。明治二十九年ごろから佐々木信綱に師事。のちに日本銀行理事となった片山貞次郎と結婚、一男一女をもうけた。長男達吉は、吉村鉄太郎の筆名で「山繭」「文学」の同人に加わった。長女総子も宗瑛の名でいちじ文筆をとった。大正九年三月、夫と死別。十三、十四年の夏、軽井沢に滞在したとき、芥川、堀辰雄らと過ごした。芥川は、聡明なみね子を「シバの女王」にたとえ「何やらわからぬ愁心」を感じ、「越しびと」「相聞」などの抒情詩を作った。また、堀は「聖家族」「物語の女」（のち改作して「楡の家」一部）などに、みね子親娘を描いた。（「日本近代文学大事典」）短歌雑誌「心の花」によって作歌にはげんだ片山広子は、歌集「翡翠」を大正五年三月「心の花」叢書（竹柏園発行の短歌叢書）として出版、同年六月の「新思潮」に芥川龍之介は「翡翠」の書評を寄せている。芥川が「心の花」叢書の一冊である歌集「翡翠」の書評を同人雑誌「新思潮」に掲載したその間の事情はよくわからない。芥川の古い友人である香取秀真が編集員に加わっていた関係かもしれない。芥川も「心の花」には柳川龍之介の筆名で歌や「大川の水」を載せている。

「翡翠」書評の中で芥川は、〈我をしも親とよぶひと二人あり斯くおもふ時こころをさまる〉をすぐれた歌として取りだして紹介しているが、この時芥川は二十五歳、東京帝国文科大学英文科の学生であったが十年後の片山広子との交渉など思いもよらなかったであろう。いわんや「親とよぶひと」の一人である娘と自分のまな弟子が自分の死後いくつかの物語の展開をみせることなどは。こうして堀辰雄の文学的生涯、すなわち「ルウベンスの偽画」「聖家族」「菜穂子」の創作は、彼の文学上の師である芥川龍之介の死を起点とするのである。

大正十三年と同十四年の芥川と共に過した軽井沢の夏は、堀辰雄によって「ルウベンスの偽画」に描かれ形象化されることになる。夏の高原のホテルで彼と一人の少女とのささやかな心理的やりとりを見守っている母、〈そのとき二人は、露台の上からあたかも天使のように彼らのほうを見下ろしている彼女の母に気がついた〉と作中で描かれている。この作品では片山広子の肖像は、夏の高原という道具だての中にかすかに美化されているにすぎない。やがてこの映象は「聖家族」において象徴的に描かれることになるのだが、ここで堀が捉えたテーマのいくつかは、その後の彼の作家生活にあって宿命的なものとして把握され繰り返して登場してくることになる。まず第一に九鬼（芥川）であり、彼が尊敬しているらしい細木未亡人（片山広子）そして娘絹子（宗瑛）そして河野扁理（堀辰雄）、これらの人物によって繰り広げられる「聖家族」の物語、これを分析することは芥川文学を継承し、ある側面にあって徹底的にこれを拒絶した堀辰雄の文学的生涯を把握することにつながるであろう。

「聖家族」は〈死があたかも一つの季節を開いたかのようだった〉という有名な一節によってはじまるが、この一文ははからずもこの作品が背景に著名な作家であった芥川龍之介の死を持っていることを我々に暗示的に伝えている。すなわち読者一般に対してあらかじめ作中の小説家九鬼が芥川龍之介に他ならないことを知識として要求しているこの小説は、内容においては心理小説の範疇に属しながらも、日本の伝統的な私小説の立場にたつものである。

九鬼は自分の気弱さを世間に見せまいとしてそれを独特な皮肉でなけ

れば現わすまいとした人だった。九鬼はそれになかば成功したと言っていい。だが、彼自身の心の中に隠すことができればできるほど、その気弱さは彼にはますます堪えがたいものになって行った。扁理はそういう不幸を目の前に見ていた。そして九鬼と同じような気弱さを持っていた扁理は、そこで彼とは反対に、そういう気弱さをできるだけ自分の表面に持ち出そうとしていた。彼がそれにどれだけ成功するかは、これからの問題だが――。

以上、引用した部分が作家九鬼について作中で語られるすべてであり、扁理と九鬼の関係を示す説明もこれに尽きている。作家九鬼の映像は読者に対して数年前に自殺した芥川龍之介その人のものであることを予備知識として要求しているのであり、それなくして九鬼の作中での存在感は稀薄である。「聖家族」一編を箱庭に例えれば、九鬼の存在は背景をなす日本の四季移り変る自然と見ることができよう。「聖家族」の主人公である河野扁理は〈九鬼を裏がえしにしたような青年〉であると説明されており、九鬼とは反対の人生を生きていこうと決意している。「聖家族」は扁理という一人の男が死んだ九鬼という大きな存在をいかに超えていくかということを切実な問題として取り扱っている。このことは作中では次のように書かれている。

死んだ九鬼が自分の裏側にたえず生きていて、いまだに自分を力強く支配していることを、そしてそれに気づかなかったことが自分の生の乱雑さの原因であったことを。

つまり「聖家族」という一編の作品にあっては河野扁理と二人の女、細木夫人親子の間でとりかわされる心理的なやりとりよりも背景となっている九鬼の死の影のほうが大きいのである。生前の九鬼に精神的圧迫を加えたらしい一人の女とその娘、九鬼の死後扁理もまたその娘を愛する故に傷つかないわけにはいかない。「聖家族」の中で繰り広げられるこの心理的なやりとりは後年の堀辰雄の言葉を借りて言えばさながら「小さき絵」(イディル)と言えるだろう。作品内部よりも作品のすべてを覆っている九鬼の死の影の方が一層大きいこの作品の堀辰雄の人生にあって意味するところは重大である。その意味からも冒頭の〈死があたかも一つの季節を開いたかのようだった〉という言葉は象徴的である。「聖家族」の物語は九鬼(芥川)の死によって始まり、扁理(堀辰雄)の心の中から九鬼の影が消えた時、本当の終りを告げることになる。

芥川と堀の関係、あるいは芥川が「越し人」とよんだ片山広子と芥川の生前での現実の交渉についてはすでにみてきてあるので以下はすべて堀によって再構成された作品内部の現実に限定されることになろう。あるいは堀辰雄によって捉えられ把握された人物像をみていくことになる。九鬼が扁理を好んでいたことは〈九鬼はこの少年を非常に好きだったらしい〉とあるとおりで、扁理の夫人に対する態度も〈九鬼が夫人を心から尊敬しているらしいのだけが分った。それがいつしか夫人を彼の犯しがたい偶像にさせていた〉とあるところから絶対的な尊敬の態度であることがわかる。芥川と堀の親密な関係は、現実にあっても書簡等がこれを裏付けているわけだが(註6)扁理の細木夫人への尊敬、しいては娘絹子への愛着が尊敬する作家九鬼の細木夫人に対する憧憬的態度から端を発していることも重要である。〈九鬼が夫人をよほど好きなのではないかしらと思い出したのは、ずっと後のことだ〉とあり、あるいは〈この人もまた九鬼を愛していたのにちがいない、九鬼がこの人を愛していたように。と扁理は考えた〉ともある。

芥川龍之介と片山広子との間には、確実に愛が存在していたらしい。少くとも芥川死後の堀辰雄はそう考え、夏の軽井沢で目撃した光景は事実として認識されていった。〈軽井沢のマンペイ・ホテルで偶然、彼女は九鬼に出会ったことがあった。その時九鬼はひとりの十五ぐらいの少年

を連れていた〉とある。確かに「聖家族」は冒頭の一節で明らかなように芥川龍之介の死によってすべてがはじまるのである。扁理の絹子への愛着は、九鬼の細木夫人への尊敬をその理由としている。扁理の絹子への愛着と反発、密やかな心理的やりとりの背後に大きく九鬼の姿が、さらに九鬼に愛されたらしい細木夫人の姿が影絵のようにうかんでいる。破滅に終ったらしい一組の典雅な恋愛を背景にして扁理と絹子の心理的なかけひきが波のように漂っている。それが作品「聖家族」の内部構造である。

「聖家族」はあらゆる意味において芥川から課せられた堀の芸術上あるいは人生上の課題解決の形式をとっていることに我々は気づかなくてはならない。第一に扁理の絹子への愛情だが、決して平凡な結果には終らないであろうこの恋愛の行方、悲恋の色彩を持ったこの恋の根底には言うまでもなく扁理が尊敬していた九鬼の細木夫人への思いが存在している。軽井沢を舞台にする九鬼のこの未亡人に対する古典的恋愛感情なくして扁理の絹子への愛情は存在しない。扁理の精神内部に九鬼の影が存在する限り、扁理の絹子への愛は消えることはあるまい。言いかえれば扁理が九鬼の強固な精神的束縛から離脱した時、扁理の絹子への思いは断ち切られることを予想させる。すなわち堀辰雄が芥川龍之介の呪縛から解き放たれた時、堀にとって宗瑛は興味のないあたりまえの女に変るだろう。賢明な堀辰雄は事実上の処女作である「聖家族」の執筆の過程にあって芥川死後における自己の進むべき道を模索したのであった。「聖家族」掲載の昭和五年十一月という時点にあって極めてニュース性の高かった芥川の自殺という事実を作品の背景に取り入れ、作中の作家九鬼が芥川であることを事実として読者に了解させながら作品を成功させた堀のジャーナリズム的才能は今日からみても相当なものと言えるだろう。第一に作品の内容が著名な作家芥川の自殺に関係していること、第二に芥川の精神的恋愛が描かれていること、第三に堀辰雄自身が芥川によっていかに才能を愛されていたかを秘かに広言できること。さらに芥川の果せなかった恋（相手は母から娘へと変ったが）を今堀自身が進行させているらしいこと（宗瑛にとっては迷惑だったかもしれない）こうした諸々の要因を内部に隠しながら「改造」掲載の「聖家族」は名実共に堀辰雄の処女作としての位置を確かなものにしていくわけだが、作品的成功の多くの部分を堀の以上挙げたような作家的打算に負っているところに意味がある。そして堀の作家的賢明さはこうした冷酷な打算を古典主義的な心理小説の形式の内部におおい隠したことである。したがって「聖家族」は芥川の死を背景とする私小説的側面と心理小説的側面の二つの顔を持っている。(註7)

堀辰雄の芥川克服の軌跡を具体的に見ていくと、現実には堀辰雄が片山広子の娘総子(宗瑛)と結婚した事実がないことがなによりも先にみえてくる。このことは扁理と絹子の恋愛が終局的には幸福な終末を予感させながら、その過程にあってしばしば拒絶の様相を示していることから多少伺うことができる。結果的に堀辰雄の芥川的傾向の超克は、片山総子との事実上の離別によって決定的なものになったと考えられる。作品構想の内部にあっても芥川的危機回避の姿勢を見いだすことはできるが、その端緒は「聖家族」において早くもあらわれている。それは堀の描く細木夫人の姿の投影にうかがえるものであり、夫人の姿は全編いたるところで淡い抒情の色彩の中に溶けこんでいる。現実の片山広子の面影の一端は芥川夫人の回想にあるとおり、決して聖母のそれでなかったことは確実であるが。堀辰雄は芥川の見た人生の真実、人間苦を淡い色彩の美意識の中に溶けこませることで、師の芥川が自らを追い込んでいった人生苦の世界からの自己解放をはかったのである。しかし彼は芥川全否定の道を歩まなかった。彼の人生は常に芥川の描いたそれの範疇にあり、

彼の思考は芥川の思考を基盤としていた。このことは病身の堀辰雄が到底自己の配偶者としては適当とは思えない、片山総子に対して相当の執着を示したことから伺うことができる。片山総子は片山広子の娘であるという唯一の理由によって堀の愛の対象と成り得た娘であり、総子への愛情の背後には堀辰雄の芥川への全面的信頼と尊敬、さらには芥川超克の意思を隠している。〈どちらが相手をより多く苦しますことができるか、私たちは試してみましょう〉九鬼の書斎の「メリメの書簡集」に秘められていた細木夫人の筆跡は、堀辰雄自身が田端の芥川邸で現実に手にしたものであったかもしれない。客観的に事実でなくても堀の体験した心象風景にあっては事実であったかもしれない。良家の娘としての高尚な文学趣味に熱中する宗瑛こと片山総子の現実の姿を今日の我々は見ることはできないが、残されている写真で私が想像するかぎりでは到底堀辰雄の人生や芸術に理解を示す女性とは思えない。おそらく賢明な堀自身も早くからこの事実に気付いていたであろう。だとすれば堀辰雄の片山親子への創作上の執着は、即芥川への執着に他ならないと考えられる。こうした堀辰雄の心理の深層は、以下の私の論の展開にあって明らかになるはずである。堀の精神内部でのこの種の葛藤は芥川があらゆる側面から彼の生活圏の人間であっただけに、脱芥川は脱東京下町につながり、堀辰雄の現実の生活的面からも芥川精神圏内からの離脱の意味は大きい。実際には堀は芥川を疲労させた東京での社交を捨て、同時に故郷でもある下町をも捨てたのであった。が、信州追分に居住するに至る堀辰雄の内面的経過を作品の分析をとおしてみていきたい。

繰り返すことになるが「聖家族」は、芥川の精神圏内に安住していた堀の模索した脱出をテーマにしている部分が大きい。芥川死後の堀に課せられたのは、今後いかに生きるかということだが、堀辰雄の以後の年譜的事実は彼が自らこの課せられた問題をどのように処理していったかを語っている。「聖家族」の中にすでに芥川的傾向克服のきざしは見えているのであり、作中細木夫人は河野扁理の生き方について次のように述べている。

それはあの方には九鬼さんが憑いていなさるかもしれないわ。けれども、そのためにかえってあの方は救われるのじゃなくって？

作中人物の語ったこの言葉はいみじくも堀の芥川からの離説の可能性をより具体的に示していると考えられる。堀は芥川が取り組んだ内面下の苦脳を回避した。彼のこの回避の姿勢は何よりも先に東京での文壇的社交を拒否させ、作品創作上の素材にあっては、芥川の愛した世紀末の詩人たちへの拒絶の態度によって明らかである。彼の芥川精神離脱の理論的根拠、それは昭和四年三月東京帝国大学卒業にさいして提出した卒業論文「芥川龍之介論」をその先駆けとする。これについては後で立原道造のエッセイ「風立ちぬ」の分析の時再び問題にすることになろう。

堀はなによりも芥川が追求した人間の醜悪な側面を切り捨ててこれを自己の内面下において典雅な様式に再構成するよう心がけた。こうした彼の物語作家としての才能は高度な抒情的側面を伴うことで俗にいう堀辰雄的世界を構築していったと言える。そしてその萌芽は「聖家族」の未尾に典型的にあらわれている。

絹子はそう答えながら、始めはまだどこかしら苦痛をおびた表情で、彼女の母の顔を見あげていたけれども、そのうちにじっとその母の古びた神々しい顔に見入りだしたその少女の眼ざしは、だんだんと古画のなかで聖母を見あげている幼児のそれに似てゆくように思われた。

現実にこの親子（片山広子、総子）が聖母の面影をみせていたとは想像し難いことで、むしろ芸術を必要としないタイプであったことは残された回想等によって明らかである。堀辰雄の作家的才能と人生の進退は、若き日に全身全霊をあげて私淑した芥川の突然の死をいかに克服、打破

するかの一点にかかっていたといっていい。彼は生前の芥川が愁心を抱いたらしい片山広子、その娘総子への彼独自の恋の創作によって芸術上はむろん人生上の生き方を模索したといえるだろう。打算に生きる女達への堀の執拗な執着は、今日の我々からみると彼の師芥川への愛着のいか程に激しかったかを示しているように思える。

片山総子は美しく、堀辰雄の虚構の世界にだけしか生存の意義を見出し得ない上流階級の女の一人にすぎないが、彼女の示したであろう打算とエゴをいかに抒情的零囲気に溶解させ軽井沢と信濃追分の高原の休日を背景に古典的物語を展開させるか、堀の作家的才能の発露はこの一点にかかっていたといえるだろう。

片山広子親子を「聖家族」において聖母に近づけるという造型的技巧を示した堀は、最後の作品「雪の上の足跡」で再び聖書の物語に接近してその創作生活を終るわけだが、彼のめざした古典的造型技術は、芥川の苦しんだ人生における二律背反の内面の苦痛を抒情性の中に解消する方向に進んだとみるべきである。芥川の宿命的な課題であった対立する自我の構図「西方の人」でいう理想と現実の溝は、堀辰雄独自の造型的な抒情性の確立の内部に解消したと考え得るだろう。

彼はそれを「聖家族」の結末において示し「雪の上の足跡」において示すことによって創作生活の首尾を一貫させたのである。しかも「聖家族」「雪の上の足跡」のそれぞれは芥川の最後の作品「西方の人」とその素材を同じくするのである。「ルウベンスの偽画」にはじまり「聖家族」において展開しさらに「菜穂子」へと変貌する堀の宿命のテーマ「母と娘」の肖像は、芥川克服の文学的課題と重複し、堀の精神生活を半生にわたって占めることになる。芥川の精神からの離脱において苦渋した彼は、関心を日本の古典に向けるようになる。(「物語の女」の続編創作の過程から古典文学への関心が生まれてくることになる。)

私は何かいいしれぬ空虚な気もちに襲われ、それから脱れるために、ひたすら心を日本の古い美しさに向けだした。そうしておもに王朝文学に親しんだ。

(「堀辰雄作品集第三・風立ちぬ」あとがき)

昭和四年三月東京帝国大学国文科を卒業した堀辰雄は、大学卒業の十年後に折口信夫の国文学を学ぶようになるのである。

(註1)芥川龍之介全集「筑摩書房版九巻全集」(昭和46年)第六巻P153

(註2)「相聞、二」は「或阿呆の一生」(三十七、越し人)にそのまま採られており、「相聞、三」は小品「沙羅の花」に採られている。この「相聞、三」は、大正十四年四月十七日付室生犀星宛書簡にも引用。なお一諸に同書簡にひかれている相聞は次のようなものである。

〈歎きはよしやつきずとも/君につたへむすべもがな/越のやまかぜふき晴るる/あまつそらには雲もなし〉

(註3)佐藤春夫編、「澄江堂遺珠」(昭和八年三月二十日)

(註4)芥川龍之介の遺書「小穴隆一宛」(昭和二年春)芥川は生前何通かの遺書を書いたが、詳しくは、森啓祐著、「芥川龍之介の父」(桜楓社)所収の「芥川龍之介の遺書」の頃を参照されたい。

(註5)芥川文述、中野妙子記「追想芥川龍之介」(筑摩書房)P41に芥川の葬儀に参列した片山広子の横顔が芥川夫人によって紹介されている。

(註6)「僕の友だち二三人」(昭和二年五月)で芥川は、小穴隆一と堀辰雄をとりあげて、堀の才能を推賞している。芥川が堀に直接会ったのは、記録によれば「大正十三年八月四日」(軽井沢日記)「大正十四年二月八日」(澄江堂日録)

「昭和二年五月一日」(晩春売文日記)などである。なお芥川が書簡で堀について言及したものには、①「室生犀星宛」(大・十三・

七・二三）②「室生犀星宛」（大・十四・一・三一）③「渡辺庫輔宛」（大・十四・四・十六）④「葛巻義敏宛」（大・十四・八・三）⑤「大島勲宛」（大・十四・八・三十）⑥「塚本鈴宛」（大・十四・九・七）⑦「佐々木茂索宛」（大・十五・九・二二）⑧「佐々木茂索宛」（昭・二・二・十六）などがある。

（註7）村松剛、「堀辰雄と立原道造」（「解釈と鑑賞」昭三六・三）「日本文学研究資料叢書、堀辰雄」（有精堂）所収のものを参照した。

## 三、「六の宮の姫君」から「曠野」

堀辰雄の古典への関心は、昭和十二年十月「かげろうの日記」（蜻蛉日記）の脱稿あたりから顕著になり、昭和十四年二月の「ほととぎす」（蜻蛉日記）、昭和十五年七月の「姨捨」（更級日記）、昭和十六年十二月の「曠野」（今昔物語）と続き、これらの作品の創作と平行して京都、奈良への散策がおこなわれることになる。彼の古典への傾斜は、その背後に常に師であった芥川龍之介の死の影を隠している。芥川からの精神的な離脱を模作する堀辰雄の大和路への旅の日々の中から年来のテーマである母と娘の物語、「楡の家」「菜穂子」「ふるさとびと」が書かれているので、こうしたことを伺うことができるのである。

片山広子から「更級日記」のことを語って聞かされ古典に素材を得た作品を創作し、古い日本へ回帰していく堀辰雄の前にやがて大和の世界が現われてくる。昭和十二年の晩春、十四年の晩春から初夏、十六年の秋、十六年の十二月、十八年の春と繰り返して大和に旅する堀辰雄の前にやがて独自の世界がひらけてくることになるのである。今回は三度めの大和への旅、すなわち十六年秋のそれに焦点をしぼって芥川の精神を把握し、ある側面にあってはこれを追随しながらも、しかし静かにこれから離れていく堀の姿を捉えていきたい。

この十六年秋の大和路への旅は、夫人への書簡の形で今日残っている。「大和路」の中の「十月」がそれであるが、この時の旅の収穫は作品では「曠野」として残されている。「曠野」は「今昔物語」巻三十、「中務大輔成近江郡司婢語」によって成った王朝小説であるが、内容的には同じ「今昔物語」に材を得た芥川の「六の宮の姫君」との類似を示している。こちらの方は巻十九、「六宮姫君夫出家語」によったものであるが。「かげろうの日記」「ほととぎす」「姨捨」と古典回帰の作品を書いてきた堀辰雄にとって「曠野」は題材的に目新しいものではないが、他の王朝小説に比べて物語が客観的になっているといわれるのは、この作品には大和路へ旅した作者自身の記憶が残っているからであろう。

自分を与え与えしているうちにいつしか自分を神にしていたようなクロオデル好みの聖女とは反対に、自分を与えれば与えるほどいよいよはかない境涯に堕ちてゆかなければならなかった一人の女の、世にもさみしい身の上話。

「大和路」の「十月」の頃にあるこの箇所がおそらく「曠野」創作の意図であろう。堀辰雄の王朝小説の頂点を成す作品が題材的にも内容的にも彼がながらく愛読した芥川作品と同じものであることに今の私は強く興味をひかれる。芥川の精神からの離脱を図る堀辰雄の芸術世界にあって芥川の影響は根強いものがあると言わねばならないだろう。彼は何よりも芥川を疲労させた東京での社交を避けた、そして独自の精神世界を守るべく創作的には古典回帰の姿勢を取るようになった。彼の周辺を取り巻く自然はあくまでも彼によって選択されたそれであり、対象に接触することによって生じる心の動揺を抒情的世界の中に拡散させていった。これは若い日に彼が師であった芥川の衰弱していくのを目撃することによって会得した生存するための処生の才とも言えるだろう。あるいは自然や古美術に親しむことで精神の危機を脱していった志賀直哉に学ぶと

ころもあったかもしれない。軽井沢に生活圏を構築し、芥川の精神的束縛からある種の解放を感じた時と、堀辰雄が王朝小説に関心を向けはじめた時とは連続している。

芥川の「六の宮の姫君」は〈歴史小説中最も完成されたもの〉（「芥川龍之介論」）であり、芥川から離れようとする時期にあっても堀辰雄の関心の範囲にあった。おそらくその理由は「六の宮の姫君」が芥川作品にあっては珍しく作中にあって激しい生き方を示すことなしに全体的に静かな諦をみせているからではないか。「唯静かに老い朽ちたい」というのが姫君の気持ちであり、これは「曠野」の創作テーマとの一致を示している。

あれは、いまおもえば、僕のさびしい詮めだった。それが何処かで、あの物語の女のさびしい気もちと触れあっていたのだな……

（「死者の書」）

と堀自身「曠野」創作の意図について語っている。「曠野」が他の王朝小説と比較して客観的な視点が設けられているとするなら、それは堀辰雄自身の芥川作品「六の宮の姫君」への愛着を示していることになろう。昔気質の役人の姫として〈悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯〉を送っていた六の宮の姫君は、父母を頼りに生きていたが、両親の死後乳母のすすめで丹波の前司を頼みに暮らしていくようになる。がやがて男は陸奥へ行ったきり帰らず残された姫は、貧困の中に老い巧ちるように死んでいくのである。運命を従順に受け入れて静かに季節の移り変りの中で滅んでいく姫の姿には、幾分なりとも作者芥川の精神の反映があろう。芥川自身は最後まで自己の内部を引き裂く知性と肉体の分裂に苦しんだわけだが、六の宮の姫君の姿はある一時期の芥川に羨望を抱かせるものであったかもしれない。堀辰雄が生涯かけてめざしたものは、芥川の苦しんだこの内部の分裂を回避することであった。彼はそれを煩雑な社交を切り捨てることで、さらには作中人物の持つ人間固有の冷たい打算を甘い抒情の中につつみこむことで芥川の直面した苦悩を回避していったのである。芥川は最後まで何者かに対して敵対し戦う姿勢を崩さなかった。堀辰雄はこうした芥川の持つ危険のすべてを避けたのである。「六の宮の姫君」は創作生活に倦んだ芥川の疲労が生みだしたものと考えられるであろう。六の宮の姫君の枯葉が秋風に舞うような人生に芥川の一時期の横顔を見ることは可能で、作中にあっても姫君の零落を落下する栗の実に象徴させている。〈栗の実が落ちたのでございましょう〉と。

昭和十六年十月、三度目の大和旅行の間、奈良ホテルに滞在して創作計画を練る堀辰雄の胸にうかんだいくつかについては漠然と指摘することができるが。

とにかくどこか大和の古い村を背景にして、Idyll 風なものが書いてみたい。そしてできるだけそれに万葉集的な気分を漂わせたいものだとおもう。

（十月十二日、朝の食堂で）

折口博士の論文のなかでもって綺麗だなぁとおもった葛の葉という狐の話。あれをよんでから、もっといろんな狐の話をよみたくなって、霊異記や今昔物語などを捜して買ってきてあったが、けさ起きしなにその本を手にとってみているうちに、そんな狐の話ではないが、そのなかのある物語がふいと僕の目にとまった。（十月二十四、夕方）

そうだ、僕はもうこれから二三年勉強した上でのことだが、日本に仏教が渡来してきて、その新らしい宗教にしだいに追いやられながら、遠い田舎のほうへと流浪の旅をつづけだす、古代の小さな神々の侘びしいうしろ姿を一つの物語にして描いてみたい。それらの流謫の神々にい

たく同情し、彼らをなつかしみながらも、新しい信仰に目ざめてゆく若い貴族をひとり見つけてきて、それをその小説の主人公にするのだ。

（十月二十六日、斑鳩の里にて）

「大和路」の「十月二十四日、夕方」の思いつきがやがて実を結んで「曠野」になったことがうかがえるわけだが、芥川の「六の宮の姫君」と内容的になんと似ていることか。「六の宮の姫君」は作品内部に対立する論題を持たない、その意味では数多い芥川作品にあって独自なものといえるかもしれない。全体がくすんだ色彩の中に沈んでいて運命に流されていく女の姿を平安末期の世相の中によく捉えている。こうした運命に流される受身の人生に対して堀辰雄が関心を持ったのは事実で、「六の宮の姫君」は堀の若い頃からの愛読書の一つであったといわれている。「曠野」は「六の宮の姫君」と同じく出典は「今昔物語」であるが、骨格は「今昔物語」であっても背景にはリルケの愛する女のイメージがあり、伊勢物語の雰囲気がある。そして全体には折口信夫の「古代研究」への堀自身の打ち込みの思いがあることが「大和路」を読むことによって明らかになる。「大和路」は堀の創作ではあるが「妻への手紙」と合わせて読むとほぼ事実に近いことがわかる。すなわち「大和路」は「曠野」創作を目論む堀の日々の散策の中から生まれたものである。

私自身はこの時期の堀が、今まで愛着を持っていた芥川作品と同じ素材を使い、同じように運命に流されて生きる女の物語を書いたことに興味を持つ。ほぼ二十日もの日々を大和路を散策しながらあれこれ創作計画を練る彼の思索の中から生まれた一部が「曠野」であることに。堀辰雄の作家生活にあって芥川龍之介は、リルケ、折口と共に学ぶべき対象であったが、とりわけ芥川は摂取すると同時に打ち捨て乗り越えるべき対象であり、芥川精神からの離脱は彼にとっての生涯の目標であったはずである。芥川と同じ作家としての道を歩んだ時から堀辰雄の人生は芥川の直面した困難と危機とをいかに回避するかにあった。彼は芥川の人生を疲労させたすべてを切り捨てた。東京を、そしてそれが持つあらゆる文壇的社交を、芥川的思考を拒否した。堀は学者的執拗さで対象に取り組むことを考えそれを実行した。こうして芥川文学の持つ対立する自我の構図は、甘い抒情の中に消えてゆき、高原の休日が堀文学の主要舞台となったのであるが。ところで昭和十六年大和路を散策する堀にとって芥川の影はどの程度に彼の意識の内部にあったろうか。

「大和路」への旅がなによりも「奈穂子」完成の直後に実行された事実に注目したい。「奈穂子」は堀辰雄の母と娘のテーマによって成った最大規模の作品であり、このテーマに固着すること自体が芥川に対する執着に他ならないことはすでにみてきたとおりである。したがって「奈穂子」の完成は長年の芥川との関係にある終止符がうたれたことを意味している。「曠野」を書いた堀の内部ですでに芥川の危機は遠ざかったと考えるべきであり、そう考えてこそ、この時期「六の宮の姫君」を視野のかたすみに入れて「曠野」を書いた堀の状況を把握できるのではないか。つまり芥川作品を下敷きに使っても動揺することのない程にこの時期の堀辰雄は芥川の精神から遠ざかったのである。堀辰雄によって受け入れられたものは、彼の好みにあった自然であり、彼の心象を反映させることを許す何物かであった。大和路の仏像は、すべて信州追分の自然とその意味においては同義であったと考えられる。自然と古美術に接することで芥川が直面した内面の危機を回避した堀辰雄の生き方は、その意味で志賀直哉のそれに近いと言えるだろう。

ここで堀辰雄の三度めの大和訪問の足取りを「大和路」(「堀辰雄妻への手紙」も参照した）を使って見ておくと。(註8)

昭和十六年十月

十月十日、　奈良ホテル着（夕方）

十月十一日、新薬師寺（朝）、唐招提寺（夕方）
十月十二日、転害門、法華寺、海竜王寺、歌姫
十月十三日、ソフォクレェヌの悲劇（朝）、飛火野、博物館、ギリシア悲劇集（夜）
十月十四日、秋篠寺（午後）、薬師寺、唐招提寺
十月十五日、京都（丸善、円山公園、独逸文化研究所、出町柳の古本屋）
十月十六日、終日奈良ホテル
十月十七日、京都（祇園の十二段家、高瀬川周辺、寺町通り）
十月十八日、奈良ホテル
十月十九日、戒壇院、三月堂、万葉植物園、
十月二十日、生駒山、河内の国高安の里
十月二十一日、博物館、東大寺（戒壇院）
十月二十二日、奈良ホテル
十月二十三日、斑鳩の里（法隆寺）
十月二十四日、浅茅が原、高畑の裏
十月二十五日、博物館、終日奈良ホテル
十月二十六日、斑鳩の里
京都（甲鳥書林？）
十月二十七日、奈良発、京都、琵琶湖ホテル

以上見てきたごとく「妻への手紙」と「大和路」では、日付けその内容に重複の部分が多いが食い違う部分もみられる。この随筆の内部に芥川的傾向を克服しつつある堀辰雄の横顔を覗き見ることは可能で、大和路散策の道すがら堀辰雄の周辺には、折口信夫によって開眼された古代の世界が開けている。古代小説を夢想しながら大和路を歩んでいる堀の周辺には確かに独特な古代世界が息づいている。むしろこの独特な古代世界の雰囲気こそが唯一の作品的成果とも言い得るであろう。この時期堀辰雄の視界から芥川の姿は消え、折口やリルケの世界が代わりに浮上している。この三人の作家は、堀の目標とすべき最大の存在でありこの事実は彼の生涯にあって不変であったが、大和路の村々を散策する日々にあって芥川の存在は稀薄である。折口の示唆によって古代世界を夢想し、さらにそれをより強固なものに結実させるために時間をかけて大和路の日々を過すという創作態度が、そもそも芥川の持つことのなかったものであるから。随筆「大和路」=「信濃路」を執筆する過程で堀は初期の芥川的傾向を完全に脱却したと考えるべきであり、折口の思索した古代世界が、この時期の堀の創作世界にあっては模範的なものとしてみえてきている。こうしたことを以下残された断片によって検証していく。

堀辰雄は彼の「芥川龍之介論」で芥川の悲劇を何よりも第一に、理想と感情の離反にみている。さらに芥川の精神の支柱であった知性の「雑駁さ」を悲劇の第二と考えている。従って出発当初から堀はこれらの芥川的傾向からの離脱を最大目標にしていた。堀の創作世界にあって芥川が学ぶべき対象であったことだけは変らぬ事実であっただけに、（堀の内心は芥川に対する執着を捨てきれなかったので）この種の生き方は困難をきわめた。芥川自身は、自己の内部の分裂に苦しみ二律背反的人生観は、彼にとって宿命的なものとなる。芥川文学を継承しつつ、ある側面においてこれを徹底的に回避した堀の生き方は、今日彼の残した作品をみても納得できる事実で、「聖家族」から「物語の女」へと堀の作品世界は繰り返して芥川の残した主題である「母と娘」の主題に帰っている。芥川精神を回避しつつなお芥川の世界からの離脱をはかることのできない堀辰雄の視界にやがて折口の古代世界がひらけてきたのである。

（註8）この箇所は、小久保実「古典ノオトの解決」（「堀辰雄全集。」角川

書店版、昭四六・十二）を参照した。

## 四、「水のうへ」から「出帆」

堀辰雄の全集には彼の創作ノートが入っているが、それを見ると彼が計画して果せなかった仕事を一望のもとに見渡すことができる。〈現在遺されている日本の古典に関するノオトや断片を読めば、殆んどが「古代研究」に収斂されてしまう〉（小久保実）と言われるほどに堀辰雄の「古代研究」への打ち込みは激しいものだったが、純然たる古典研究ではなくてリルケ的な思考を通してのそれであることは変らない。創作プランのままに終ってしまった二つの古代小説「出帆」と「水のうへ」の二つの作品を見比べながら考えていく。

「出帆」は故郷である武蔵野をあとにして難波津の港から筑紫の島に出立する若い防人、「乎刀良」の物語で、彼は故郷に父と母を残して一人で旅立ってきた十八歳の若者であった。筑紫の島で望郷の思いにかられる防人達は〈旅にあれど夜は火ともしをる我を闇にや妹が戀ひつつあらむ〉というような歌を作っては無聊をなぐさめあった。歌ったのは「荒蟲」という男、やがて「乎刀良」は陸奥に残してきた妻や子への思いに苦しむ年をとった男「興呂麿」と知り合いになり、彼によって「對馬よりもっと向うにある島」「大昔にイナヒノミコトが母を慕って波の穂を踏んで渡っていかれた」という「妣の国」について聞くことになる。それは「岬の突端の木の下」の「海の真昼」の時だった。「乎刀良」は見ることのできない「妣の国」への憧れをつのらせていく。それは「海の彼方」にあるという「死んだ母達の国」である。

「乎刀良」は或る日「荒蟲」の身替りとなって對馬への米の運搬をひきうけるが、彼の舟は嵐のため沈んでしまう。「沖つ浪來寄る荒磯をしきたへの枕とまきて寝せる君かも」彼は絶壁の下に死体となってうち上げられる。以上のようなことから創作ノートとして終ってしまったこの作品の下地になっているのは「古代研究」と「万葉集」であることがわかる。「出帆」には「巻二、二二二」「巻十四、三五七〇」「巻十五、三六六九」等の万葉歌がそのまま取られており、「海の真昼」「妣の国」等の思想は折口信夫の民俗学研究に沿った考えである。「出帆」が物語の形式を示しているのに対して「水のうへ」は一層創作ノートの意味あいが深いと言えるだろう。内容的には同じもので「水のうへ」の素材が取捨されて「出帆」が生まれたことがわかる。「水のうへ」は全編が「万葉集」の引用で終始しており、折口の「古代研究」や「更級日記」からの引き写しもみられる。「水のうへ」に引かれた万葉歌を具体的に章別にみていくと、次のようになる。

一見して明らかなように東歌や防人歌が多いことがわかる。総数七十以上の万葉歌の引用によって提示されている物語の内部に、「死の島」の章や「妣の国」の章が組み込まれていて主題を暗示していると言える。これらは「出帆」においては「海の真昼」「妣の国」の章になって堀辰雄が考えていた古代小説のあるべき姿をより一層鮮明にみせてくれている。周知のように「妣が国」「常世」あるいは「死の島」等の主題は、「古代研究」に拠るものであり、折口は〈十年前、熊野に旅して、光り充つ真昼の海に突き出た大王个崎の盡端に立った時、遙かな波路の果に、わが魂のふるさとのある様な気がしてならなかった〉と言っている。折口はこうしたあこがれを説明して〈本つ国に関する戀慕の心である〉と言うが、これが「出帆」の主人公が「對馬」の彼方に夢みた「死んだ母達の国」であることは明らかである。堀の折口への姿勢は何か芥川へのそれに似かよったものを感じさせるが、今は堀が折口の「古代研究」に親しむことによって芥川とは別個の文学観を持つに至ったことを確認しておきたい。堀の作品の内部にどの程度折口の「古代研究」が参加しているかに

| 「水のうへ」の章名＼万葉集の歌番号 | |
|---|---|
| 難波津 | ⑰3896、⑳4381、4329、4330、4380、4373、4374、⑮3625、3626、②222、⑮3660、3655、3654、3652 |
| 郷愁 | ⑳4419、⑮3669、⑭3427、3570、⑮3666、3667 |
| 海に乗り入る者 | ⑯3860、3861、3862、3863、3865、3866、3867 |
| 犠牲 | ①72 |
| 荒磯に死人を見て…… | ②222、220、4325 |
| 群島 | ⑳4398、⑭3567 |
| 東人 | ⑳4331 |
| 峠 | ⑳4423、4424、②133 |
| 花は咲けれども…… | ⑳4337、4325、4377、4344、4323、4346、4378、4326 |
| 魂鎮め | ⑥925 |
| 黒女（家なる妹） | ⑳4417、4418、4353、4357、4352、4401、4343 |
| 駿河の旅 | ⑳4345、⑭3357、3515、3520 |
| 島から島へ | ⑮3644、3615 |
| 海上の不安 | ⑳4349、⑰3895、3896、⑮3623、3624、3649 |
| 妹を偲ぶ歌 | ⑮3647、①72 |
| 家持 | ⑳4332、4333、4334、4335、4336 |

ついて私は別に論をたてるべく準備がある。

## 五、立原道造とヘルダーリン

立原道造の「四季」掲載の最初の詩「村ぐらし」にはすでに後年の立原の詩作の基本的な要素が色濃くでている。

あの人は日が暮れると黄いろな帯をしめ　村外れの追分け道で　村は落葉松の林に消えあの人はそのまま黄いろなゆふすげの花となり夏は過ぎ……

それは立原の文学的故郷である「追分」と彼が「ゆふすげの花」とよぶところの関鮎子との結びつき、さらには「四季」を主宰する堀辰雄との関係である。府立三中出身の立原が一高時代に先輩である堀辰雄と面識を持ち、堀の影響圏にあって芸術的成長を遂げていった事実に注目したい。彼の抒情詩の背景となった昭和十年の追分さらには昭和十一年の追分のそれぞれの夏は、立原の詩的背景であるばかりでなく、後になると打破すべき対象に変貌する。夏の追分に滞在中に立原が堀から得たものはリルケ的思考であり、抒情詩における自負である。最晩年追分の記憶を振り切るようにして堀辰雄の反対を押し切って盛岡、長崎への旅を強行する彼の心中には、明らかに堀の世界への決別がある。多少悪意ある見方をすれば、過去への決別の意味を持ったこの長旅を完成させなかった彼の病そのものを堀からの意味深い贈り物と考えることもできる。

昭和二年十四歳であった立原道造は、府立三中時代の国語漢文の先生であった橘宗利宛次のような書簡を寄せている。

芥川先生の死、夏休みが始まると直ぐ起ったあの出来事、僕があの事を知ったのはその翌日、何気なく朝の新聞を開いた時でした。（中略）併し、どうしてあんな偉い先生が、またどうして自殺なんかなさったのでせう。さうはいふもの、偉い先生だから人生の奥底までみつめら

れ、人生といふものに封して淋しい感、自然と比べて短い命を嘆かれ
　ああいふことをなさったのでせうか。(昭和二・八・三一)

初期の立原には、三行分けの短歌があってこれらは石川啄木や前田夕暮の影響によるものであるが、やがて師の橘宗利の導きによって北原白秋に近づくようになる。立原の書簡からうかがえるように彼の周囲には短歌に興味を持つ友人も何人かいた。杉浦明平、国友則房との交流は書簡からみるかぎり親密なものである。

〈三味の音は／きしむ艪の音とかすかにもつれ／くらくよどみし水の面流る〉(「大川端」) 立原の少年期におけるこうした大川に対する愛着を知ると私など瞬間的に芥川の「大川の水」を思いだす。芥川もまた青年期にあってその文学的出発を北原白秋の影響によってなした者の一人であるからだ。

堀の文学的生活が芥川の死によってはじまったことはすでにみてきたとおりで、堀の生涯は直接の師であった芥川の芸術上の失敗を乗り越えるべく用意されたと言ってもよいだろう。そうした堀辰雄の生き方の規範となったのが言うまでもなく「芥川龍之介論」(大学の卒業論文) で、彼はこのなかで芥川の芸術上はむろんのこと人生観上の誤りをも指摘しさらに細く分析することによって、自らの人生そのものを規制していった。その意味では彼の作品のなかで細木夫人(片山広子)が主人公にむかって「まるで九鬼(芥川)を裏がえしにしたやうな青年だ」と批評する箇所は真実に近いのである。こうして芥川とは別の人生を生きようとした堀辰雄が、やがて芥川を越えることで日本の古典に接近し、大和路散策の旅にでて芥川の「六の宮の姫君」と同じテーマと題材とで「曠野」を書いたこと、さらに彼のこうした一連の動きが、結果的には当時の時代風潮であった古典回帰のそれと同一であること等についてはすでに考察した。この時期堀辰雄の視界からは芥川の姿が消えて、折口信夫の古典世界がひらけてくることになるのである。

堀辰雄のどちらかという緩慢なこうした動きに対して同じ時期、若い立原道造のそれは何か激しさに満ちたものであった。堀辰雄に対する全面的信頼と敬慕によってその文学的出発を遂げた立原もやがて堀の世界に対する決別を示してその生涯を終るのであるが、立原の最後に模索したものが、「日本浪曼派」の掲げた精神共同体に直接的に結びついていることに対して今の私は興味と関心をひかれる。

昭和十三年七月、病状悪化のため石本建築事務所を休職するようになった時期から立原道造の決定的な心境の変化が生じてくる。彼の心境の変化は、自分の今までの生き方の否定をふくみ、今後の生き方の決意となって「風立ちぬ」論を書かせることになる。そして彼自身の現実の行動がそれに続くのである。以下「風立ちぬ」論を分析し、「盛岡ノート」「長崎ノート」をみていくことで中途で終ったこの若い魂のあり方を考えていく。

立原の「風立ちぬ」論は、一口で言うなら直接の師である堀辰雄に対する否定的意見の提示であり、堀の作り上げた生活圏から脱出しようともがく立原の心の有様をよく示している。立原の「風立ちぬ」論は堀の主要な作品「聖家族」「恢復期」「美しい村」「物語の女」等を取りあげ、自分にとって堀辰雄が何であるかを分析している。これらは立原自身の今までの生活そのものであり、堀辰雄の作り上げた「軽井沢」は立原の文学的故郷であるわけなのだが、彼はこれらの現状を打破すべく論の終わりで次のように言っている。

大きな響が鳴りわたる、出発のやうに。何のために？聞くがいい。……
僕らは今はじめて新しく一歩踏み出す。(風立ちぬ) としるしたひとつの道を脱け出して、どこへ？しかしなぜ？光にみちた美しい午前に。

立原が堀の生活圏からの脱出を模索する時、堀辰雄もまたその生き方を

変えようとしていたことにおそらく立原は気付かなかったであろう。

堀辰雄の「軽井沢」を舞台にして作られた物語は、すべて「聖家族」を起点としている。以後同じテーマで作られた「物語の女」までの作品には、芥川の精神がどの程度反映しているか。「軽井沢」そのものが芥川が堀に残した作品舞台であったことを考えれば、芥川の堀を精神的に束縛した期間は、前後十年におよぶと考えられる。すなわち堀がはじめて大和を訪れたのは昭和十二年六月、芥川の死からちょうど十年の月日が流れていることになる。堀が大和訪問を果し、日本の古典世界に静かに脱却しつつある同じ時期、若い立原もまた彼の文学的故郷である「軽井沢」「信濃追分」を捨てようと決意しつつあったのである。

この〈風立ちぬ〉の停止するこの瞬間に僕は美しい晩秋の最高のアダジオを經験する。

ひとつの陽ざしが凋落を明るく彩る。

立原道造が日本縦断旅行を実行に移す直前に書きあげた「風立ちぬ」論は、あらゆる意味で立原の過去への決別の意味を持っていたし、同時に日本縦断旅行によって彼が成し遂げようとしたものが何であるかを暗示している。

つひに僕らの封話は用意される。僕らはいつ存在し、なぜ愛するか。詩人もまた「風立ちぬ」のなかで絶えず、この「いつ」と「なぜ」とを僕らに問ふ。そして僕らは、詩人に問ふ。互い聞き得べきものとして。そして僕らの對話は可能である。

立原はこの「風立ちぬ」論の中で状況から脱出すべきいくつかの可能性を提示してみせたが、「対話」もその一つの可能性として理解し得るだろう。「対話」によって閉鎖的状況からの脱出が可能とする彼の考えはヘルダーリンに負っている。難解な彼の「風立ちぬ」論を支えているものの一つはヘルダーリンの思想であり、ゲーテのそれである。このことは彼の精神的背景を成している教養の範囲を自と伺わせている。〈水が崖から崖へ投げられ、年とともにさだかならぬところに落ちてゆくやうに〉といい、さらに〈あまりにも豊かであらゆるに詩人は過ぎ去ったものをおもひ、やがて来るものを待ちのぞむことに疲れ果てこの見せかけの空虚のなかで屢々ただ眠りたいとねがふ。けれども彼はこの夜の無のうちに固く立ってゐる。〉と続けている。(註9)

こうしてみてくると「風立ちぬ」論の中にあってヘルダーリンは、休息を与えるものとしての役割しか果していないようだ。しかし立原はすでにこの年、昭和十三年一月下旬に芳賀檀宛に書簡を送って次のように述べている。

いま、あの御本のなかで呼吸するとき、私の決意は新らしくたしかめられます。私もまたひとりの武装せる戦士！この變様に無限に出発する生！（中略）「危険のある所、救ふ者又生育す」とは何といふ美しい言葉なのでせう。

ここではヘルダーリンは「対話」や「眠り」によって安らぎを与えるものとしてではなく、困難な状況を突破すべき積極的意味あいにおいて引用され理解されているのである。ヘルダーリンと同じ動機から詩作をはじめた立原は、ヘルダーリンの「危険のある所、救ふ者又生育す」という思想を唯一の詩作の基盤とするにいたるのである。(註10)

昭和十二年から十三年にかけて若い立原道造の内部に急激な変化が訪れる。この新しい自己の世界を創造せんとする彼の決意は、十三年九月からの日本縦断旅行となって実行され結果的には彼の死を早めることになるのだが、これより早く二、三年以前に立原は、ヘルダーリンの次のような言葉を引用している。

八月四日、ヘルダーリンは日記に、過度の孤獨は自己を破壊する、適度な孤獨に於て、浄福な生活を営み得ると誌してゐる。

（「猪野謙二宛書簡」昭和十・八・五）

病を押しての日本縦断の旅行は、直接的には彼の「文芸」掲載作品「鮎の歌」に否定的見解を示した高見順への対決の姿勢を作るため、言うなれば新しい自己を再生せんとする彼の意志によって無謀にも実行されたものであるが（註11）それ以前にも彼の内部には現状改革、内部から自己の生存そのものを再生せんとする意志が示されていたのである。例えば芳賀檀宛書簡（昭和十三年一月下旬）を読むと彼が期待した再生せる自己が一体いかなるものであったかが判明する。ここで彼は「古典の親衛隊」によって自らの生を再生すると述べている。〈私の生を新しい生に導きたいとおもひます〉と。このように宣言された彼の再生への道は、数日後別の友人に送られた手紙の内容から一層鮮明なものになってくる。

君に　僕は突然告白する、僕はアポロに愛せられてゐる、と。しかし
僕はアポロに殺される、そのため　僕の生は　アポロに封して復讐を
おもひつつ　ひとつの花となる。

（「杉浦明平宛書簡」昭和十三・二月上旬）

この時期の立原の激しい動きに対しては彼の時代への抵抗感の稀薄をつく意見もあるわけだが、今はただ事実関係の確認だけしておきたい。第一に彼は協同体への参加をのぞんでいた。第二に彼は運命愛を示している。そしてこれらの彼の理念の根拠となったのは言うまでもなくヘルダーリンであった。しかし立原が参加を願った協同体が、ヘルダリンが夢想した個人の自由を基調とする国家とは程遠くむしろヘルダーリンの宿敵であったヘーゲルの建設した権力への忠誠を求める国家であったことは立原自身の関知しないところである。直接の師であった堀辰雄が長年のテーマであった「母と娘」の物語から離れ、芥川的傾向を超克しつつあったこの時期、立原もまた自分を取り囲んでいた精神圏から強引に離脱しようとしていたと言えるだろう。

堀辰雄が芥川精神を内包しつつ静かに古典的世界に接近しつつあった同じ時、立原もまた自分の環境からの離脱を過激に実践しつつあった。ただ彼が個人の限界を認識する地点からこれを打破するため参加を求めた協同体が、権力への忠誠を要求する国家であったということは偶然にすぎないとも言えるし、若い立原に心情の傾斜を示させた協同体が、今日からみて唾棄すべきものであったことなどは立原道造という詩人の死に一層の悲劇的色彩を加えることになったともいえる。

立原が身を寄せ参加することを願った対象が服従を要求する権力国家であった偶然に対して戦後彼の友人であった杉浦明平が批判しているが、これも正確には正しくない。立原が希求した協同体は、個人の自由を基調とするヘルダーリンが夢想したような国家であったろう。これはヘーゲルの主張した現実的・実践的な権力国家の上位に位置するもので、実践的原理として作動することのないかわりに高次元にあって夢想された詩人独自の幻想の協同体と捉えることができる。従って現実に責められるべきは、自己の抱いた夢想とその夢想を寄せる協同体との間に存在した落差について認識し得なかった立原の現状認識の甘さについてであろう。しかしこれとて錯綜する昭和十年代の時代状況とさらには立原自身の若さを考えれば責めることはできない。ただ私自身は晩年の立原が、堀辰雄の建設した信濃追分の環境からの離脱を激しく希求し、協同体への参加を夢想した事実に注目したいと思う。ここにあっては彼が参加を夢想した協同体が現実には服従を要求する国家であったことは一つの偶然として退けられるはずである。ヘルダーリンの夢想した国家哲学がヘーゲルのそれのように実践的原理として機能し得ない故をもって彼の協同体の理念を退けられないように。

堀辰雄が一つの転機をむかえていた同じ時期、若い立原にも重大な内的変貌があったと考えるべきであり、それは晩年の彼がしばしば引用し

接近の姿勢を示したヘルダーリンのそれとの類似を伺わせないでもないが、立原の場合独自の言語世界を織り成すほどの成熟を示し得なかったのは彼のあまりに早い死による。ヘルダーリンにあって彼のギリシア主義は祖国ドイツへの愛と一体となって独特な郷土愛を詩作しているが、立原の「中世」接近の姿勢と突然の「日本浪曼派」参加希求の態度はどのように結びついているのか。

個人的事情や時代的圧迫から生き急ぐことを強いられた立原の詩的世界に果して彼独自の言語世界は開けたのであろうか。夭折によって果し得なかったとしても確かに彼の視界にヘルダーリンのように詩人独自の世界の展望があったことは事実である。何よりも「対話」によって現状を打破しようとしたことが注意をひきつける。〈つひに僕らの對話は用意される（中略）そして僕らの對話は可能である〉さらに「眠り」についての詩作もまたなされている。

ふみくだかれてもあれ　己のやさしかった望み己はただ眠るであらう
眠りのなかに　遺された一つの憧憬に溶けいるために
（「溢れひたす閣に」）

立原の詩作にあらわれた「対話」や「眠り」についての独自の見解はすでに考察したごとくヘルダーリンの思索に直接につながっている。（註12）

むしろ立原自身は自分をヘルダーリンの運命と一体化させた時期もあったのではないかと思われる箇所もある。立原は杉浦平宛書簡（昭和十三、二月上旬）で〈僕はアポロに殺される〉と言っているが、周知のようにこれは有名なヘルダーリンの言葉である。

そして人が英雄たちについて言う表現に従えば、ぼくはこう言うことができるだろう、アポロがぼくを撃ったのだ、と。
（「ベーレンドルフ宛書簡」一八〇二・十二・二）

前記の書簡でヘルダーリンは続けて

どうかすぐ返事をくれたまえ。ぼくにはきみから発する純粋な響きが必要なのだ。友人間に通う魂、会話と手紙のなかでおこる思想の形成は芸術家たちに必要なのだ。

とも言っているが、立原もまた書簡の交換によって自己の詩作の成熟を考え、友情の確認によって精神の基盤を築いていったのではなかったのか。

晩年の立原は北の盛岡へさらには南の長崎へと過去を振り切るようにして日本縦断の旅を続けるわけだが、おそらくそこには閉鎖的な状況を行為によって打破しようとするゲーテの影響があったであろう。彼は疲れ果てて長崎に到着するが、病床に横たわりながらも自分の運命を愛すると言っている。

疲れて唇が乾いて眼が覚める。咳と熱に苦しめられる。この古い港町には、武君の家の人たちの親切な看護だけがささへで、知る人もなく、魂はよるべなくふるへてゐる。しかし僕は僕の運命を愛する。
（「猪野謙二宛書簡」昭和十三・十二・十）

私が立原道造全集を一読した感じでは、彼の詩は立原という一人の青年の表面的な一部を伝えているにすぎないということである。立原と親交のあった伊東静雄がさまざまな雑念を抱きながら結局詩作にあっては蝶と花としかその対象とし得なかったように、立原の詩作もまた彼の真実の姿をその背後に隠しているのではないのか。

昭和十二年、十三年は立原にとって現状脱却の意思を内部に秘めた、その意味で危機の期間であったが、この時期彼が「日本浪曼派」への接近を示した事実をさらにみていく。

僕は中世にずゐぶん食欲を感じてゐるんだ。この能の理論からさかのぼって、定家の歌論に行かうと思ってゐる。「新古今集」がいちばん勉

強したいんだ。

（「生田勉宛書簡」昭和十・六・十）

立原が「新古今集」への接近を示す姿勢は納得できる事実であって彼の繊細な神経と生活を離れた思索は、根本的に人間の営みそのものから離れている。彼のこうした中世に対する接近の姿勢は、自我の追求をその基本的な生存方法としている近代の否定につながり、やがて全体的なものに対する帰属の態度に発展していったと考えられる。彼の残した書簡や雑文の類はその詩作品よりはるかに膨大な量であるが、それは中世にさらには「日本浪曼派」に接近し、激しく揺れ動く一つの魂のありようをその矛盾の姿そのままに示している。

晩年に立原が愛したヘルダーリンもまた全身でギリシア精神の中に埋没していった詩人であったが、彼の場合古代ギリシアは自己の再生とさらにはドイツ民族再生の規範としての意味を持っている。〈私もまたひとりの武装せる戦士！この變様に無限に出発する生！〉と立原が帰依の心を寄せた国家は、ヘーゲル流の権力国家であったことはすでに述べた。ヘルダーリンは詩作にあって終始一貫して協同体の理念を推賞したが、彼の掲げた協同体、ドイツ国家はヘーゲルの考えた国家概念とは根本的に敵対するものであった。それは書簡体小説「ヒュペーリオン」においてしばしば語られ作品中にあってついに実現をみることのない美しい幻想の協同体である。ヘルダーリンは彼独自のこの協同体建設の実現をはかるため、作中の主人公に終章において次のように語らせている。

○ Wie der Zwist der Liebenden, sind die Dissonanzen der Welt. Versöhnung ist mitten im Streit unb alles Getrennte findet sich wieber.

Es scheiden unb kehren im Herzen die Adern und einiges, ewiges, glühendes Leben ist Alles.“

So dacht ich. Nächstens mehr.

「世界の不協和音は、愛しあう者どうしのいさかいに似ている。和解は、その争いのさなかにある。そして別れ別れになったものはすべてまためぐりあうのだ。血管は心臓で別れてまた心臓へ帰る。そしていっさいは、一なる、永遠の灼熱している生命なのだ」そうわたしは考えた。ではまた。

美しい協同体建設の希望を断念しヒュペーリオンは祖国ギリシアの自然に帰還しそこで精神の充足を得て調和的世界に満足することを予想させる結末であるが、ヒュペーリオンは自己の夢想を放棄していない〈「Nächstens mehr」ではまた〉という最後の言葉がそれを伺わせている。このことはやがて「エムペドクレス」において取り上げられ、再び繰り返して強調されることになる。

ヘルダーリンは詩作にあっても人間精神の調和充足による美しい幻想の協同体国家の理念を掲げてみせている。

㈠ Unb vom Himmel getränkt, rauscht der lebendige Strom, Wenn es drunten ertönt, unb ihre Schätze die Nacht zollt. Unb aus Bächen herauf glänzt das begrabene Golb. —

かなたの低いところとどろきが聞こえ、夜がその宝をおしげなく見せるとき、生にあふれた河は天空の恵みを受けてざわめき流れるのだ。かくて小川のなかから、埋められた黄金が光をはなつのだ。（「メノーンのディオティーマ哀悼歌」第六連）

ここでは実現され得なかった協同体もさらには、記憶の底に埋没してしまった過去もすべてが時と共に再生するというヘルダーリンの意思が示されている。ヘルダーリンの掲げた国家理念が結果的にはロマン的思惟にとどまることは「哀歌」等を読むことによって理解され得るはずで、ヘーゲルの主張する理念が実践的な国家理念として作動するものである

ことと好対照を示している。

(二) Aber länger nicht mehr! schon hör ich ferne des Festtags Chorgesang auf grünem Gebirg und das Echo der Haine,
Wo der Jünglinge Brust sich hebt, wo die Seele des Volks sich Stillvereint im freieren Lied, zur Ehre des Gottes,
Dem die Höhe gebührt, doch auch die Tale sind heilig;

だが、もうこれ以上待つこともないのだ！早くもわたしは遠方に、祭の日の合唱が緑の山派の上で歌い、森がこだまするのを聞く。そこでは若人たちの胸はふくれ、民の魂は、神の誉れのために、自由な歌のなかで静かに一体となる。この神には高みの御座がふさわしい、けれども谷間もまた神聖だ。(「多島海」)

「多島海」はヘルダーリンの考えた協同体の現実の姿を我々に示しているように思われる。彼のギリシア主義は、過去遁世の姿勢を示していない。むしろ祖国ドイツをして来るべき民族のあるべき姿を示顕させたものとして解されている。彼のギリシア主義は内部に熱心な祖国主義と結びついており、漠然とした世界民主主義といったユートピアからも遠い。それ故に、彼の言う古代ギリシアは懐古的なものではなく、再生するドイツ民族の来るべき理想国家に結びつくのである。以上のようなことが(一)(二)の引用から伺うことができる。

立原は〈日本の中世ばかりでなく、西洋の中世にも僕は食欲を感じてゐる。暗黒時代なんていはれるくせに、僕は、あの時代のすべての藝術に觸れるたび、はげしいよろこびをおぼえる〉(「生田勉宛書簡」昭和十・六・十)と言いながらもあくまでその興味は彼の詩作の源泉としての範囲から逸脱していないようにみうけられる。〈光栄と悲哀に飾られて、私たちが戦列に着く〉(「芳賀檀宛書簡」昭和十三・一月下旬)と参加を願った戦前の日本と彼が愛した中世とはどのように結びつくのか。立原が執着を示した中世は果して彼に何をもたらしたのだろうか。彼の中世への関心はただ詩作にあってのみ影響を与え、昭和十年代を生きる現実の彼の人生を規制する何ものをも与えなかったような気がする。強いて言うならば中世は個性埋没の時代であり、暗黒時代と言われる中世に何かひかれる立原の精神の暗い部分が、直接的に昭和十年代の日本に結びつくことになったとも解され得る。中世もさらには戦前の日本も基本的には、個人の自由を容認しないということで一致しており、花や蝶を生涯歌い続けた立原の心の暗黒部分が無意識にこうした世界への接近を示したとも言える。さらに彼の繊細な神経と虚弱な肉体が自由を基調とするかわりに責任を要求する社会を拒絶したとも解される。

ヘルダーリンにとって古代ギリシアは再生を期待する祖国ドイツのあるべく姿としての規範の意味を持っており、古代ギリシアの美しい協同体は直接にドイツ国家の基本理念として有効であり、これらの国家哲学はヘルダーリンの内部にあってロマン的思惟として生きている。ギリシア主義とドイツ主義との統一を考え、詩人としての社会的使命感に燃えて繰り返してこの協同体を推賞し、哀歌にあるいは讃歌において美しい協同体のあるべき姿を模索し続けたヘルダーリンと比較した時、当然のことながら立原の愛着を示す中世と戦前の日本とは結びつきにおいて弱いと言えるだろう。ただ文学的世界においてのみ考えれば立原の愛した中世の新古今集への執着が、ひるがえって「日本浪曼派」の古典回帰の風潮に結びついたことはあり得る。ただこの場合両者の結びつきは文学的世界だけに限られ、その規範はロマン的思惟としてのみ有効である。

ヘルダーリンの推賞した美しい協同体は将来のあるべきドイツ民族協同体に結びつき、いつの日か実践的原理として作動し得る可能性を内に秘めた予言的な国家規範である。しかし立原の場合は、戦前の権力への

服従を要求する国家に参加を希望しながら、現実には何を成すべきか最後までためらっていたようである。

僕らは今はじめて新しく一歩を踏み出す。（風立ちぬ）としるしたひとつの道を脱け出して。どこへ？しかなぜ？光にみちた美しい午前に。立原が現実に出発を遂げようとした〈美しい午前〉とは一体何であるか。病弱をおしての盛岡へさらには長崎への旅は彼の言う〈美しい午前〉の何であるかを認識するために企てられたものであったかもしれない。疲労の果てに長崎に到着した立原は、衰弱した体を横たえながら〈魂はよるべなくふるへてゐる。しかし僕は僕の運命を愛する。〉と言っている。ここにあるのは敗北感でもなく厭世主義でもない。むしろ人生の苦痛に対する英雄的な忍従主義である。この時期の立原は何か全体的な永遠なものとの結びつきでも持っていたのだろうか。長崎であらゆる期待を裏切られながら立原の嗟嘆の声には明るい色彩が感じられる。

周知のようにヒュペーリオンは行為に裏切られてディオティーマを失い、ドイツ民族への失望によって打ちのめされながらやがて祖国ギリシアの自然の内に充足するのであるが、彼は絶望しながらも自分の立場を放棄しない。自分の運命を愛するといっている。人生において不断に降りかかってくる苦痛に耐えることに喜びを見いだしていく態度はいうまでもなく、ヘルダーリンのものであり、作者の分身のような主人公ヒュペーリオンは次のように言っている。

(一) Und das ist herrlich, daβ wir erst im Leiden recht der Seele Freiheit fühlen.

わたしたちが苦痛のなかではじめて魂の自由を真に感じるのは、すばらしいことだ。

(二) Ich hatt es nie so ganz erfahren, jenes alte feste Schicksalswort, daβ eine neue Seligkeit dem Herzen aufgeht, wenn es aushalt und die Mitternacht des Grams durchduldet, und daβ, wie Nachtigallgesng im Dunkeln, gottlich erst in tiefem Leid des Lebenslied der Welt uns tont.

わたしは昔からのあの運命についての名言を、これほど深く実感したことはない。それはこう言っている。心がじっと忍んで傷心の夜を耐え抜いたとき、ひとつの新しい浄福がひらけてくる。闇夜に聞こえる小夜啼鳥の歌のように、深い苦しみのうちにはじめて、世界の生命の歌が神々しくひびいてくるのだと。

運命そのものから徹底的に裏切られながらもヒュペーリオンの関心は真の絶望からほど遠い。彼のこの独自の運命愛はおそらく祖国ギリシアとの深い結びつきによってもたされたものであろう。神々の祝福を受けながら最終的にヒュペーリオンは、ギリシアの自然の内部に帰依し、調和的世界に充足する。

〈僕は僕の運命を愛する〉という立原の運命愛もまた彼がその精神の内部にあって自我を越えた伝統的な古典世界に結びついていたからではなかったのか。今の私は立原の「日本浪曼派」への接近を一つの誤謬と見なしたくない気持ちが強い。

結婚までしようと思ひつめてゐる可憐な愛人がせっかく出来たのに、その愛人をとほく東京に残して、さうやって一人で旅をつづけてゐるなんて、いかにも立原らしいやり方だなぞと話し合ってゐた。（「木の十字架」）

堀辰雄は立原の晩年の生き方についてこのように述べているが、立原自身にも自分が実行したこの旅行の意味は認識し得なかったことだろう。蝶や花によって表面的に飾られた彼の詩作からは決してうかがい知ることのできない心の秘密の一端を書簡やノートから多少知ることができる。それは彼の意識の暗い側面であり、中世にひかれ「日本浪曼派」に接近

する彼の精神の暗い部分でもある。

かはいさうな僕ら、なぜ愛しあひながら、しかも妨げるだれもゐないのに、離れようとねがったりしなくてはならないのだらう。

（「長崎ノート」）

ヘルダーリンの描くヒュペーリオンもまた調和と愛の象徴とも言うべきディオティーマとの平和な生活から一人離れて行為の世界に参加し裏切られて祖国に帰ることになっている。祖国ギリシアの大自然に囲まれて落胆のヒュペーリオンは〈苦痛のなかではじめて魂の自由を真に感じるのは、すばらしいことだ〉と言っている。立原もまた苦痛に耐えることによって真実の独立を得ることができると考えたのか。彼の接近した「日本浪曼派」は、西洋的意味あいによる近代の否定を主張する日本主義であったが、その掲げた古典主義が立原には調和的世界を約束するものと映じたのであろうか。嗟嘆の声をあげるヒュペーリオンを沈静の世界へ導いていったギリシアの自然のように。

堀辰雄は郷土である東京下町を捨て信濃追分に自分一人のための新しい郷土を作ったが、心の深層にあっては、軽井沢は郷土として彼の精神に完全に密着していなかったのもかもしれない。彼の心の内部の郷土喪失の意識が、無意識のうちに彼に「日本への回帰」をうながし古典世界への接近を要求したとも考えられる。「大和路」は結局堀にとって彼の故郷とは成り得なかったようだが。「日本浪曼派」は一般的に容易に「農本主義」に結びつく。それは日本の近代化によって失われ郷土を再建しあるいは取りもどすことでもあった。

立原にとって信濃追分は彼の故郷とは成り得なかったのだろうか。まず第一にそれは堀辰雄の世界であり、立原が再生するために決別すべき第一のものであったはずだ。彼は再生への旅の途中で堀辰雄に次のように書き送っている。

あなたの今までのお仕事の意味が、僕をふかくとらへてゐます。どんな仕方でか？僕はむしろにくしみで！とおこたへしなければならないのです。

（「堀辰雄宛書簡」昭和十三・十・十九）

立原の盛岡、長崎への旅は過去への決別と新しい再生への旅であったようだ。彼が捨てなければならない過去の世界には、彼を教え育んだところの堀辰雄と信濃追分、さらにその周辺のすべてがあったはずだ。再生への旅の途中盛岡の宿に野村英夫が訪ねてきた時の立原の反発は担当なものだ。それは再生への道を歩みはじめた彼の世界に突然参加を願った過去からの亡霊にすぎないからだ。立原は野村英夫について言っている〈だがあの無恥な少年へのにくしみと復讐はかんがへまい〉（盛岡ノート）。立原は過去の世界との接触を徹底的に拒否している。

背後の緊迫した時代の動きがもはや立原に立ち止って熟慮する時間的余裕を与えなかったのである。盛岡から長崎への彼の追いかけられるような長旅は続く、それは故郷喪失者の「日本への回帰」を意味していたようだが、ついに長崎は立原の期待を裏切って彼の故郷とは成り得ないのである。

たうとうこの南方は僕に何ものも與へてくれなかった　しかし　僕は　何かを自分のなかにきづき得た

（「生田勉宛書簡」昭和十三、十二、十三）

立原が自己の内部に完成させたものは何か。おそらくそれはヒュペーリオンと同じ苦痛に耐えること、言うなれば「忍従の英雄主義」とでも言うべきものではないのか。ヒュペーリオンのこの種の考えの背後にはヘルダーリン自身の精神が深く彼の故郷シュワーベンの土地に密着していた事実がある。幻想の協同体を古代ギリシアに求めながらもヘルダーリンの関心は故郷から離れることはない。自由を規範とする国家概念を提

唱しながら理想の地、古代ギリシアの美しい協同体はドイツ民族の将来建設すべき国家哲学に結びついているのである。ヒュペーリオンが痛苦に耐えながら再生が可能なのは、彼の精神がギリシアの自然と結びついているからに他ならない。確かに故郷の自然を離れた時、人は不幸にならなければならないのである。「日本浪曼派」の運動は近代化によって魂の故郷を失った人々の起死回生のロマンであったはずで、それは人々の心の奥底で一つの幻想として、ロマン的思惟としてのみ可能な夢であったはずだ。今日を生きる私は昭和十年代を生きた人々の「日本への回帰」を笑うことはできない。人は誰でも魂の故郷を求めるものだからだ。

ヘルダーリンは愛と自由とを基本とする協同体国家を「ヒュペーリオン」において提唱した。この理念は一つのロマン的思惟として止りながらもヘーゲルの国家に反対し、ビスマルクの国家にも反対し続けたのは歴史的事実である。ヘルダーリンの掲げた理想国家がドイツ民族によって打ち立てられた事実は今だ一度もないが、将来のあるべき国家像として今も予言的意味を持っているはずである。

○ Denn voll göttlichen Sinns ist alles Leben geworden,
Und vollendend, wie sonst, erscheinst du wieder den
Kindern Überall, o Natur! und, wie vom Quellengebirg, rinnt
Segen von da und dort in die keimende Seele dem Volke.

生きとし生けるものはことごとく神々しい心に満ちあふれているのだ。そしてむかしながらに完成をもたらしながら、あなたはふたたび子らの眼の前にあまねく現われるのだ、おお　自然よ！そして泉のわき出る山脈からのように、祝福がいたるところで民の芽生える魂のなかに流れこむのだ。

（「多島海」）

中世に興味を持ち「日本浪曼派」に接近し、信濃追分を捨て再生への旅にでた立原は、詩作にあってはついに花や蝶を歌い続ける詩人として終ったようである。結局彼の詩は、彼の精神の混沌を整理するにまでは至らなかった。彼自身もまた自己の未完成を認識していたようである。〈観念的な夢想が肉體の限界でくづれたやうな感じだ〉（昭和十三、十二、七）と言っている。長崎旅行によって立原は、魂の平和を約束する故郷を見つけ得たのであろうか。死の床に横たわった彼は、見舞いに訪れた芳賀檀に〈五月の風をゼリーにして〉持ってきてほしいと言ったそうである。死に臨んでも彼は自分の魂の暗い側面を表にだすことをしなかったわけだ。

（註9）立原は「風立ちぬ」論で註を付してハイデッガーの「ヘルダーリンと詩の本質」（斎藤信治訳）を参考文献として使用した旨言いそえている。なお本論で私が引用するヘルダーリンの詩句はすべて河出書房新社「ヘルダーリン全集、全四巻」（昭四一）に拠る。

（註10）書簡、芳賀檀宛（昭十三・一月下旬）杉浦明平宛（昭十三年・二月上旬）等で立原はヘルダーリンのこの詩句を引用している。

（註11）小川和祐の立原道造研究に拠る。

（註12）拙稿「昭和文学の展望（II）―文芸文化とドイツ、ロマン派」（琉球大学教育学部紀要第二四集第一部、一九八〇・十二）

## 六、まとめ

日本浪曼派の運動が推進したものの一つに日本古典への回帰の精神がある。このことについてとりわけ重要な役目を荷ったのは保田与重郎であるが、今回も保田の分析ではなくその間接的影響を受けたと思われる作家達の作品成果に焦点をしぼることになった。

芥川龍之介の死によって文学的出発をとげた堀辰雄が自己の内的必然と当時の時代風潮の中で静かに日本的古典美の世界に下降していった内

実を把握し、そうすることによって保田与重郎が当時の青年達をして覚醒せしめたところの日本的美意識のある側面を理解し得たように思う。芥川龍之介と堀辰雄、二人はそれぞれに表と裏の関係を今日明瞭に私達に示しているが、こうした固定した肖像を打ち壊し、もう一度より一層、動的なものに、社会参加の精神をみせることによって前記の二作家の精神をある面において融合してみせたのは、若い立原道造であった。彼は堀辰雄が精神の部分的側面で受けとめた日本浪曼派の運動を全身で受けて行動をもって参加を願った。詩人であった彼が政治的リアリズムにおいて欠けていた結果、自己の精神の内部に掲げた日本主義と現実の当時の日本との間に介在した溝に気づかなかったのはやむを得なかったとも言える。ところで私の興味の範囲にある日本浪曼派の運動は、あくまで文学的意識の内部に限定されるので、全身で社会への参加を願った晩年の立原の姿勢を私自身は是認したいと思っている。

保田与重郎の日本浪曼派が成したもののなかで最大の成果の一つは、日本古典への新しい視点を提示したことであろう。だが残念なことに三島由紀夫の指摘によるまでもなく、この文学運動は作品的成果において欠けるものがあると言える。日本の古典の内部に我々は厳密な意味での過去の暗黒な側面を見いだすことは難しい。文学は当然なことながら歴史ではない。日本古典の美意識は苛酷な歴史の内部に咲いた華として捉えることはできるし、文学の内部からは真の歴史的事実が抜け落ちているとも言えるだろう。苛酷な歴史的真実が抜け落ちている故に、古典の内部の伝統的美意識が戦時下にあってその有効性を最大限に発揮し得たとも解され得る。戦時下に生きる人々の精神が容易に伝統的美意識を日本古典に求め得たのも、古典世界からは歴史が抜け落ちていたからではなかったか。保田与重郎の果した役目は、現実に苛酷な歴史を生きている人々に対して、歴史抜きの美を与えることだったとも言える。すなわち美しい幻想を。今回私はこの保田与重郎の間接的影響を受けることによって文学的変革を成したと思われる堀辰雄と立原道造の側面に光をあてることで日本浪曼派の運動の部分的理解に達し得たと思う。この運動が果した古典主義の風潮、日本への回帰について私はさらに論を展開していきたいと考えている。